

Title	フォンターネの社会小説-19世紀後半プロイセン社会におけるジェンダーの諸相-
Author(s)	赤木, 登代
Citation	
Issue Date	
Text Version	ETD
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/1436">http://hdl.handle.net/11094/1436</a>
DOI	
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	赤木 登代
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17261 号
学位授与年月日	平成 14 年 7 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科独文学専攻
学位論文名	フォンターネの社会小説－19 世紀後半プロイセン社会におけるジェンダ ーの諸相－
論文審査委員	(主査) 教授 林 正則  (副査) 教授 玉井 暁 助教授 三谷 研爾

#### 論文内容の要旨

本論文は、ドイツの作家テオドーア・フォンターネ (Theodor Fontane) (1819-1898) の 1878 年以降に執筆された「ベルリン社会小説」と呼ばれる作品群を、現代のジェンダー論の視点から読み直し、フォンターネの文学世界の基本的な性格を明らかにするとともに、その再評価を試みたものである。論文(日本語)は、序論、4つの章、むすびから構成され、本論、注、文献一覧を含め A4 判 117 頁(400 字詰原稿用紙に換算して 470 枚)からなっている。

序論では、19 世紀後半プロイセン社会における階級構造の変容と、それに伴っての「男らしさ」「女らしさ」という社会規範の揺らぎが、フォンターネの小説世界の時代的背景をなしている点が指摘されている。

第 1 章では、ドイツ・ロマン派によって最初は肯定的な意味で作りに出された「自然としての女性」という観念が、19 世紀ドイツ社会の進展とともに、次第に抑圧のシステムを支えるものとして機能するに至る経緯が明らかにされる。そして、1998 年に公刊された、未発表の書簡を多く含むフォンターネ夫妻の往復書簡集などを検討することで、小説執筆当時すでに老境にあった作家自身のジェンダー意識を探っている。

第 2 章では、19 世紀後半ドイツにおける結婚の社会史を瞥見し、一方では 1870 年のドイツ帝国の成立以後急速に保守化・反動化して行く社会情勢、他方ではアウグスト・ベーベルに代表されるような女性解放運動の高まりのなかで結婚制度が揺らぎ始め次第に空洞化して行く様相が、結婚の破綻を扱ったふたつの小説『不貞の妻』(L'Adultera) と『返すよしくなく』(Unwiederbringlich) を通して明らかにされている。それらの作品で、夫婦間の悲劇的な葛藤を冷徹に見据えながら、しかしフォンターネが結婚制度そのものへの批判に踏み込んでいない点が指摘される。

第 3 章は、19 世紀後半プロイセン社会における「名誉」規範の問題が取り上げられ、それが「男らしさ=勇気」「女らしさ=純潔」というジェンダー規範と裏表の関係をなしていること、男性の場合には「決闘」によって「名誉」回復の機会が与えられているのに対し、女性には名誉回復の機会が最初から奪われていることが指摘される。『シャハ・フォン・ヴテノー』(Schach von Wuthenow) と『セシル』(Cécile)、そして代表作である『エフィ・ブリスト』(Effi Briest) の 3 作品において、「名誉」規範に翻弄される主人公たちの悲劇を的確に造形しながら、規範意識を完全に抜けきることができないフォンターネのアンビヴァレントな姿勢も指摘している。

第 4 章は、遺作として残された未完の小説『マティルデ・メーリング』(Mathilde Möhring) を取り上げ、健気で

賢明な小市民の娘マティルデがプロイセン社会の階級構造流動化のなかで、男女の性別役割を逆転させながら、自立の道を求め続ける姿を通して、フォンターネが意図せずに「新しい女性像」を提示し得ていることを指摘している。

以上の本論を踏まえて、フォンターネがその「社会小説」において、男性によって作り上げられた「性別規範」の中で人間らしく生きようとして悲劇的な犠牲とならざるを得ない女性たちを描きながら、ついにその「性別規範」そのものを批判するには至らなかったが、しかしそこには性差別を内包する社会構造への根底的な批判の萌芽を読みとることができる結論づけている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の意義は何よりもまず、老境に至って作家活動を開始したフォンターネが、その一貫して保守的な政治的信条にも関わらず、小市民の生活に注ぐ愛情溢れた、しかしまた透徹した眼によって、生き生きとした時代の群像をその小説世界において造形するとともに、それを通して時代の病弊をも鋭く描き出した作家であったことを、膨大な量に上る作品の詳細かつ確かな読解によって見事に浮き彫りにしている点にある。

本論文の第2の意義は、社会史的な背景と作品世界との間の密接な関係を解きほぐしながら、作家の生きた19世紀後半のプロイセン社会における「男らしさ」「女らしさ」というジェンダー規範の「揺らぎ」という新たな視点から、多くが結婚の悲劇を扱ったフォンターネの「社会小説」の世界を考察することで、フォンターネ文学のこれまで省みられることの少なかった特質を明らかにした点である。

本論文の第3の意義は、その鋭い社会批判にもかかわらず、ジェンダー規範に対するアンビヴァレントな姿勢の故に、フォンターネが性差による差別構造への根底的な批判には届かず、女性解放の方向性を指し示すことができなかったことを明らかにした点である。

ただ、ジェンダー研究の趨勢に対する論者自身の姿勢の「揺らぎ」がそこここに感じられ、それがかえって「文学」に「作家の動機と意図」を求める性急な態度につながっている点には、率直に言って、文学評価の問題として疑念を感じざるを得ない。また、同時代の文学状況、他の作家たちとの関連への言及があれば、フォンターネの作品世界の特質がいっそう立体的に鮮明に浮かび上がったであろう点が惜しまれる。

しかし、これらの点は本論文の学術的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。